Seamus Heaney の世界

― “Blowing up sparks for a meagre heat”―

杉　野　　徹

アイルランドの詩人 Seamus Heaney（1939－ ）は1995年ノーベル文学賞を受賞した。1923年，W.B. Yeats（1865～1939），1925年 B. Shaw（1856～1950），1969年 S. Beckett（1906～1989）らの受賞に続いてアイルランドで４人目になる。1995年10月，Stockholm の受賞講演で，*Crediting Poetry* と題して Heaney が述べた内容は，その題名に示されるように，詩のもつ力への信頼であった。受賞の95年までに８冊の詩集，つまり，*Death of a Naturalist*（1966），*Door into Darkness*（1969），*Wintering Out*（1972），*North*（1975），*Field Work*（1979），*Haw Lantern*（1987），*Station Island*（1984），*Seeing Things*（1991），を出しており，1995年受賞後は，*The Spirit Level*（1996），*Electric Light*（2001），*District and Circle*（2006）の三冊を出しているが，これらの詩集を通して流れているのは平和への希求である。北アイルランドという抗争の国に生まれた Heaney が，流血や恐怖のなかで詩を書くためには，絶えず詩のもつ意味を問い続けなければならなかったであろう。ノーベル賞受賞講演ではそれを次のように告白している。

... for years I was bowed to the desk like some monk bowed over his prie-dieu, some dutiful contemplative pivoting his understanding in an attempt to bear his portion of the weight of the world, *knowing himself incapable of heroic virtue or redemptive effect,* but constrained by his obedience to his rule to repeat the effort and the posture. *Blowing up sparks for a meagre heat.*[1)]（イタリックス筆者）

ここで述べられているイタリックスに近い表現の一部は ‘Exposure’（*North*）

１）Seamus Heaney, *Crediting Poetry*（Loughcrew: Gallery Books, 1996）pp. 19–20.

に詠われている。この詩は Heaney が故郷，北アイルランドから南アイルランドの Dublin 郊外 Wicklow に移り住んで書いた詩であるが，Heaney が北から南に移ったのは1972年８月であった。カソリックの公民権運動が激しく起こった，特に1969年以降の British 側との抗争，1972年１月30日，British の落下傘部隊による Bloody Sunday 事件のカソリック殺戮，その後の IRA の報復と応酬が原因であった。Wicklow でラジオから故郷の IRA の攻撃や，Loyalists の攻撃などを聞きながら，12月雨の日，Wicklow の家でわが身の非力ともどかしさを覚えながら書いたのが ‘Exposure’（「曝されて」）である。

Heaney はどのような世界に曝されていたのか。故郷北アイルランド Ulster で “meagre heat”（「わずかでも温かさ」）を生みだすために，Heaney がどのように詩の役割を考えているのか，いくつかの詩を通して考察してみよう。

（１）詩人の故郷 Ulster

Between my finger and my thumb
The squat pen rests; snug as a gun
（‘Digging,’ *Death of a Naturalist*）

これは Heaney の詩人としての宣言の詩 ‘Digging’ の書き出しの２行であるが，「ずんぐりとしたペンが銃のようになじんでいる」と，ごく当たり前のように，物騒な銃が比喩として登場する。詩人が紛争の地に身をおいていることを垣間見させる言葉であるが，詩人は祖父や父が使った鍬の代わりにペンを用いて，“I’ll dig with it.” [2] と宣言する。‘Digging’ は以後, 故郷北アイルランド６州 Ulster, 世界の惨状，人間性を掘り下げる象徴的詩となっていく。

12世紀アイルランドがイングランドの支配下になって以来，征服者と土着の人たちの構図は，多くの悲劇を生み出してきた。特に，1534年イングランドが英国国教化した後は，プロテスタント（英国国教会員）によるカソリック教徒

２）Heaney は詩人を農夫と同じ畝を耕す者という。Seamus Heaney, *Preoccupations Selected Prose 1968–1978*（Faber and Faber, 1980）, p. 65.

支配という宗派を絡めた構図となっていく。Oliver Cromwell の1649年アイルランド進攻とカソリック殺戮，さらには，イングランド国王となったオランダ人の William of Orange がボイン川の戦さで，アイルランドに勝利（1690年）を収めて以降，決定的にカソリック教徒は抑圧の中で暮らすことになる。アイルランドの５分の４の南26州が，北６州とは別に，1922年自由国となり，1949年独立してアイルランド共和国になったが，Heaney が暮らす北は Britain の一部のままであった。南と一緒になってアイルランドとしての国作りを目指す北のカソリック教徒と，Britain の一部にとどまるべきだとするプロテスタント支配者層，地主層の現状維持派の北は，流血の内乱となって，Heaney のノーベル賞受賞の前の年まで続くのである。対立構造は，Orange 対 Green，Protestants 対 Catholics，Unionists 対 Nationalists，Loyalists 対 Republicans，そして Paramilitary 対 Provisional IRA 等など，様々な呼び方で示される。Heaney は St. Patrick を守護聖人とするカソリック教徒の家族に生まれた。Sweet William という花の名でさえ，英国王，William of Orange，を思い起こさせるので好まないといい，*The Penguin Book of Contemporary British Poetry*（1982）に Heaney の詩が編纂された時, 編者に対して, “My anxious Muse... has to refuse the adjective.” と “British” という語に厳しく抗議して “... be advised/ My passport’s green/ No glass of ours was ever raised/ To toast *The Queen.*” [3)] と，*Open Letter*（1983）を出版したほどである。Heaney は “British soldier” として第一次世界大戦に狩り出されて戦死したアイルランド詩人 Ledwidge を悼んだ詩 ‘In Memoriam Francis Ledwidge’（*Field Work*）でも，Ledwidge の言葉を引用して，“British” として違和感を持っていた Ledwidge を褒める。“to be called a British soldier while my country/ Has no place among nations”「祖国が諸国のなかで認められてもいないのに，英国兵士などと呼ばれ」を引用しながら「今でこそ死んで地下で合唱をしているものの，英国愛国者の奴らなどとはキーにピッチも合わせはしなかった」と詠うのである。

You were not keyed or pitched like these true-blue ones

３）Seamus Heaney: *An Open Letter*（Derry, The Filed Day Theatre Company, 1983）, p. 9.

Though all of you consort now underground

‘Traditions’（*Wintering Out*）では，“custom, that ‘most/ Sovereign mistress’/, Beds us down into/ the British isles” と「あの尊厳をもつ女王という習慣が僕たちをベッドに寝かし “British isles” のなかに引き入れてしまうのだ」と “bed” のメタファーを用いる。Heaney がここでいう “beds us down” は乙女，アイルランドがイングランドに犯されるという ‘Ocean’s Love to Ireland’（*North*）や，また愛の睦みを詠いながら，実は1801年のイングランドとアイルランドの合併法に言及した ‘Act of Union’（*North*）を想起させるであろう。‘Punishment’（*North*）では姦淫の女性を通して北の状況を描く。題名の通り「刑罰」が問題なのだが，時を越えた二通りの刑に処せられた姦淫の女が登場する。まずはこの詩の前半に登場する紀元一世紀の14歳の ‘little adulteress’。ドイツ北部の Windeby 泥炭地から掘り出された少女で，その姿はまるでタールを浴びたように黒ずみ，溺死の刑を受けた姦淫の少女である。貧しさのために他部族に身を売ったのだろう。栄養失調の少女である。それと後半に出てくる，現代の北アイルランドでのカソリックの女たち。British の兵士と関係をもったためにカソリックの仲間から敵に身を売ったと鉄柵に縛られタールを掛けられて罰せられた女たちである。Heaney は過去も現在も見られるこうした悲劇を前に “I who have stood dumb” と何もすることはできない “artful voyeur”（巧みな覗き屋）の自分を責める。故郷の北は “the split culture of Ulster” [4)]であり，プロテスタントの統治者と被征服者のカソリックの争いはまさに，神と女神の祭礼間の，また信奉者間の争い “a struggle between the cults and devotees of a god and a goddess” [5)]であると，Heaney は観る。Heaney の生まれ故郷，Derry 州の Mossbawn の言葉そのものが二つの意味，Scottish の “Moss” ということばと Gaelic の “white” を意味する “bán” とからなる入植者側と植民地化された地元の地名をもっているのだ。IRA の Provisionals への憎悪を “These･･･these... Irish” と Heaney はまったく偏見の

４）*Preoccupations*, p. 35.
５）Seamus Heaney, *Finders Keepers Selected Prose 1971-2001*（New York: Farrar Straus Giroux, 2002）p. 26.

ない友人さえ無意識に言ってしまうのを聞いたことがあるという[6)]。

Heaney が “the dominant caste”[7)] と呼んだ警察やプロテスタントと，どのような暮らしをしたのか。彼らは ‘The Other Side’（*Wintering Out*），抑圧をする側の人間なのだ。その抑圧ぶりを *North* に収められた，‘A Constable Calls,’ ‘Ministry of Fear’ や他の詩で見てみよう。まず，子供の頃，経験した自宅への「お巡りの訪問」である。ある日，お巡りが自転車で農作物の作付けを検査にきた。Heaney はお巡りの質問に父が作付けを誤魔化しているのを逃さない。“Any other root crops? ”「もう他の根菜は植えていないのか」と聞かれ，父は “No” と答えたが，息子は種イモが切れて，その列にカブを父が植えていたのを知っていた。父は嘘を言ったと，子供ながらに恐怖と罪意識を覚えるが，父の嘘もばれず, お巡りは去る。少年 Heaney は “His boot pushed off/ And the bicycle ticked, ticked,　ticked.” と法の番人のお巡りの自転車が時限爆弾のようにカチ，カチ，カチいわせながら，去っていくのを聞くのである。恐怖と安堵の時であった。お巡りに調べられるといえば，‘Ministry of Fear’ がある。検閲所で銃口を突きつけられ，名を聞かれる。懐中電灯をもって黒牛のように車によってくる。

Policemen

Swung their crimson flashlamps, crowding round
The car like black cattle, snuffing and pointing
The muzzle of a sten-gun in my eye:
‘What’s your name, driver?’
‘Seamus...’
Seamus?

Seamus は James の意味でカソリクの人たちがつける名前ある。Norman，Ken，Sidney はプロテスタントの名前だが，Seamus は ‘sure-fire Pape’（極めつけのカソリック）（‘Whatever you say say nothing,’ *North*）である。警官に名を聞かれ，

6）*Preoccupations,* p. 32頁.
7）*Ibid.*

‘Seamus’ と答えた瞬間に「なに，シェイマスだって」と問い直され，身構えられるのである。“Ulster was British” なのだ。

Ulster was British, but with no rights on
The English lyric: all around us, though
We hadn’t named it, the ministry of fear.（‘Ministry of Fear,’ North）

上記の “English lyric” への権利さえ持ち合わせられない，と言っているのは，Heaney が警官に，友人の Seamus Deane の詩の草稿が入っている手荷物を調べられたことに言及したものである[8)]。Heaney は1971年の年末 Belfast の街は軍隊が溢れ[9)]，バリケードが張られ，街のあちこちで両手を挙げさせられ調べられている人々がいる様子を描く。“Keep Ulster Protestant,” “Keep Blacks and Fenians out of Ulster”[10)]と落書きが壁に書かれ，クリスマスの可愛い電球などどこにもない。装甲車があちこちに見られ，夜警が回り，取調べがあり，紛争地区には街燈もない。暗闇は狙撃兵にはまたとない好都合であり，闇を歩くことは，死を招くことと同じであった。この厳戒態勢はカソリックの公民権運動への対抗措置で，IRA の激しい運動に ‘Internment’ が1971年８月９日導入され，問答無用に，罪状なし，裁判なしで，カソリックたちは逮捕，投獄が可能になった。1971年末までに1,576名が拘束され，さらに144名が死ぬ有様であった[11)]。*Wintering Out* の献詩には，その強制収用所の様子が書かれている。Heaney は夜更けになると強制収用所 The Long Kesh は飛行場のように街で一番明るい所[12)]と記すが，献詩にあるのは，朝靄の静寂の中，車からの光景で，爆弾で地面がくぼみ，木立の中は機関銃防御柵があり，遠くに新しい強制収容所がある。アイルランドの抗争事件 “troubles” の象徴となり，Heaney が南に移る契機となっ

8）Floyd Collins, Seamus *Heaney*: *The Crisis of Identity*（Newark: University of Delaware Press, 2003）, p. 102.
9）*Finders and Keepers,* p. 44.
10）*Ibid.,* p. 45.
11）Michael Parker, *Seamus Heaney*: *The Making of the Poet*（London: MacMillan, 1993）, p. 93.
12）*Finders and Keepers,* p. 46.

た Bloody Sunday 事件は既にふれたが，Heaney はこの事件を ‘Casualty’（*Field Work*）に，街角の落書きをそのまま “PARAS THIRTEEN BOGSIDE―NIL”（落下傘部13　ボグサイド０）と殺戮人数をサッカー試合の得点のように，British 側による殺傷人数13人，カソリック側による殺傷数は０人，と書いている。British の Bloody Sunday 事件に，IRA の報復がさらに過激になった。夜間禁止令を IRA は出したが，禁止令を破り，パブに出かけた Heaney の飲み友だち，カソリックの老漁師は殺害された。このような北の緊張を生き延びるのは寡黙を貫くこと。‘Whatever you say, say nothing’（*North*）では，北の寡黙を語りつつ，宗教の話はご法度，と次のように詠っている。

‘Religion’s never mentioned here,’ of course.
‘You know them by their eyes,’ and hold your tongue.
‘One side’s as bad as the other,’ never worse.
Christ, it’s near time that some small leak was sprung

In the great dykes the Dutchman made
To dam the dangerous tide that followed Seamus.
Yet for all this art and sedentary trade
I am incapable.

ここで，‘the Dutchman’ はオランダから来て1688年即位したイギリス国王 William of Orange を指し，“dykes” は大英帝国が北に強いている制度を意味する。北に布かれた制度に，“leak”（漏れ，ほころび）はカソリック教徒への譲歩とか，対立への平和の糸口を意味するであろう。“sedentary trade” は Yeats の ‘Sailing to Byzantium,’ からの引用だが，机に座る詩人としての働きをいう。ノーベル賞受賞講演で述べた “I was bowed to the desk like some monk bowed over his pridieu” と同じである。詩人として働きにも関わらず，平和をもたらすことができない，無力さを噛みしめながら，北の６州 “wee six” を詠うのである。抗争で焼き打ちにされた家から，大八車で死者が運び出されるのを見て，詩人はど

う言ったらいいのだろう。

> What do I say when they wheel out their dead?
> I'm cauterized, a black stump of home.
>
> 'Northern Hoard,' *Wintering Out*

Heaney はわが身を郷里の "a black stump" と嘆く。 役に立たない存在となって，廃墟の残る焼焦げた切り株である。子供のころ，拾ったフリント石で火を熾そうとして出来なかったことを詠った詩 'Tinder' がある。

> We clicked stone on stone
> That sparked a weak flame-pollen
>
> And failed, our knuckle joints
> Striking as often as the flints.
>
> （5 Tinder, 'Northern Hoard,' *Wintering Out*）

この詩は象徴的で，子供時代，夕暮れ時，車座になって，肩を寄せ合い，希望の火を熾そうとしたエピソードと，現在，過去よりももっと大量虐殺の時代，北の人々は原始時代に戻ったように荒涼としたツンドラの風の中で冷たい燃え殻の上にしゃがんでいる対比である。"Now we squat on cold cinder/ Red-eyed, after the flames' soft thunder/ And our thoughts settle like ash." 上の "black stump" といい，"We squat on cold cinder" といい，故国は，"Is sour with the blood/ Of her faith"（'North,' *North*）であり，"cankered ground"（'Veteran's Dream,' *Wintering Out*）であった。Heaney はついに北を離れた。北を去ったことは，当然のことながら，故国北の仲間から裏切り行為とされ，激しく非難された。Heaney はこの移住を "an escape from the quicksand of relativism, a way of crediting poetry without anxiety and apology" [13] と語っている。Heaney はノーベル賞受賞講演で，'Exposure'（「曝されて」，*North*）を引用して，南に移った時のことを語る。殺

13）*Crediting Poetry*, p. 14.

戮が日常化した中で詩を通じて「わずかでも温もり」を得よう（“Blowing up sparks for a meagre heat”）とする。Heaney 自身，泥濘の競技場で助けを求める人たちのために才能を注ぐ英雄 Osip Mandelstam，や Milosz, Yeats など多くの詩人を頭に描いて，自分を重ねているのであろう。“How did I end up like this?” と Heaney は苦しむ。北を去った理由を，政治的，宗教的意図を「拘禁者でも，密告者でもない」と否定しながら，

I am neither internee nor informer;
An inner emigre, grown long-haired
And thoughtful; a wood-kerne

Escaped from the massacre,
Taking protective colouring
From bole and bark, feeling
Every wind that blows;

Who, *blowing up these sparks*
For their meagre heat, have missed
The once-in-a lifetime portent,
The comet’s pulsing rose.　　（イタリックス筆者）

「内なる逃亡者」の罪意識がつきまとう。安全な南に来ても，迷彩色の服で身を隠し，殺戮から逃げて，「わずかでも温もりを得ようとこれらの火花を吹いて熾す」のだが，“sparks”が詩であることは間違いあるまい。“these” と複数なので，今詩人が書いている ‘Exposure’ の詩行あるいは，この ‘Exposure’ に代表されるような他の詩を含むかもしれない。Heaney は Czeslaw Milosz の詩行 “I was stretched between contemplation/ of a motionless point/ and the command to participate actively in history”（‘Away from it all’）を *Station Island* のなかで引用する。まさに ‘Exposure’ の中の Heaney であるが，歴史への参画を “actively” にとは何を意味するのか。死者への追悼，巡礼，Heaney の頭から馴染みの死んだ人た

ちは脳裏をはなれない。詩は歴史的瞬間と隣り合ってあるもの，また並行するものである（“A poem floats adjacent to, paralle to, the historical moment,”）[14]という詩と読者の関係は，“the relation is placatory and palliative”[15]であるという。詩は心を慰め，和らげるものでなくてはならない。‘Tinder’（*Wintering Out*）も，火を熾そうとする試みであった。Heaney が願う “a meagre heat” は “The end of art is peace”（‘The Harvest Bow,’ *Field Work*）と父の作る麦藁の蝶結びを見ながら，Heaney は詠ったことがあるように，“peace” と置き換えても良いかもしれないし，またノーベル賞受賞講演でのべた “glimpsed ideal”[16]と理解しても間違いではなかろう。悲惨な現実のなかで，生きる希望，癒しを，Heaney は詩作を通じて求めたのである。Heaney が *North* から次に *Field Work* を出したとき，二冊の詩集の転換をこう書いた。“shift in trust: A learning to trust melody, to trust art as reality, to trust artfulness as an affirmation and not to go into the self-punishment so much.”[17] *Field Work* では芸術を現実のものとして信頼する。自己を責め立てることをせず，肯定的に artfulness を信頼することだという。“artful voyeur” や，“An inner émigré”（内なる逃亡者）との罪意識から，詩への信頼を訴えるのである。

（２）詩への信頼

Heaney は Stockholm の受賞講演で，1976年１月５日に北の Armagh 州で起きたプロテスタント10名銃殺事件を取り上げた。その内容はこうである。

冬の夕暮れ，工場から帰宅の労働者を一杯にのせたミニバスが，覆面の銃をもった男たちに止められ，全員下車を命じられた。道路わきに全員整列させられ，一人のガンマンがカソリックの者は一歩前に出ろ，と命じたが，ミニバスの労働者の中には，たった一人のカソリックしかいない。当然のことながら，整列させられた労働者たちは誰しも，カソリックの男がやられる，覆面の男た

14）Seamus Heaney, *The Government of Tongue*（London・Boston: Faber and cFaber, 1988）, p. 121.
15）*Ibid.*
16）*Crediting Poetry*, p. 20.
17）Neil Corcoran, *Seamus Heaney*（London: Faber and Faber, 1986）, p. 127.

ちはプロテスタントの連中だ，と考えた。一歩前に踏み出すカソリックの男の決断が迫られる恐怖の一瞬。

> In the split second of decision, and in the relative cover of the winter evening darkness, he felt the hand of the Protestant worker next to him take his hand and squeeze it in a signal that said no don't move, we'll not betray you, nobody need know what faith or party you belong to.[18)]

だが，カソリックの男が一歩前に出たその瞬間，ガンマンはカソリックの男を突き倒し，後列のプロテスタントの労働者たちが銃弾を浴びた。覆面の男たちは IRA，カソリックであった[19)]。闇の中でそっとカソリックの労働者に手を差し伸べ，握り締めたプロテスタント労働者の行為は宗派を超えた相手を思う愛である。一瞬ではあるが，“peace” の原型，“glimpsed ideal” が存在したと Heaney は言ったのである。これこそ悲劇の中の “meagre heat” であろう。

Heaney はノーベル賞受賞講演で，自作の詩二つと，Yeats の詩一篇を引用している。‘Exposure,’ ‘St. Kelvin and the Blackbird’（*The Spirit Level*）そして Yeats の ‘Meditations in Time of Civil War’ であるが，これらはミニバスのプロテスタント労働者たちの悲劇の背後に流れた愛と希望といった内容で一致する。

‘St. Kelvin and the Blackbird’ はこんな詩である。St. Kelvin は Wicklow の Glendalough に創設した修道院で618年に亡くなった大修道院長だが，体が収まらず，手が外に出てしまうような庵で祈りをしていたところに，一羽の母親のクロウタドリが St. Kelvin の手を小枝と間違えて卵を産み，巣作りをした。St. Kelvin は，身じろぎもせず，卵が孵り，小鳥が巣立つのを待つ。

> Kelvin feels the warm eggs, the small breast, the tucked
> Neat head and claws and, finding himself linked
> Into the network of eternal life,

18）*Crediting Poetry*, p. 18.
19）*Ibid.*

Is moved to pity: now he must hold his hand
Like a branch out in the sun and rain for weeks
Until the young are hatched and fledged and flown.

Wicklow は先に述べたように Heaney が北から移ったときに暮らした場所であるが，2005年５月８日，天皇皇后両陛下がアイルランドを訪問されたとき，親交のある Heaney が案内したのもこの Wicklow の St. Kelvin の場所であり，読んだのもこの詩であった。Heaney は Stockholm 講演で St. Kelvin について言った。

> ... overcome with pity and constrained by his faith to love the life in all creatures great and small, Kelvin stayed immobile for hours and days and nights and weeks, holding out his hand until the eggs hatched and the fledglings grew wings, *true to life subversive of common sense, at the intersection of natural process and the glimpsed ideal, at one and the same time a signpost and a reminder*. Manifesting that order of poetry where we can at last grow up to that which we stored up as we grew.[20)]（イタリックス筆者）

イタリックスの「自然の時の経過と垣間見た理想の十字路で，常識を打ち壊すような現実の生活に誠実に」は，いづれ卵は雛になり飛び立っていく（垣間見た）理想を抱き，常識では考えられないような，苦痛に耐えながらの姿勢をとり続けることをいったものだが，これは無論，現実の北の人たち，苦しみの中にいる人たちが，Kelvin と同じように理想を垣間見て，現実の苦難に耐えることを意味している。

Yeats の詩は ‘Meditations in Time of Civil War’ の６連 ‘The Stare’s Nest by My Window’ も同様である。1922年夏，南アイルランドが英国自治領「自由国」として12月６日発足する数ヶ月前，Yeats が自分の屋敷としている The Tower にも爆弾が聞こえ，近所から煙が立ち昇り棺を載せた車が何台も通る，そんな中

20）*Ibid.*, p. 20.

で書かれた詩であるが，酷い現実と垣間見る理想が詠われる。“The bees build in the crevices/ Of loosening masonry,” と壊れていく家（故郷）の空き家になったムクドリの巣に，巣をつくるようにと蜂に呼びかけている。廃墟と建設。Yeats は，蜂蜜など考えられない場所に蜜の香がし始めた不思議な経験をしたと自身の解説を加えている。動乱のなかに蜜の香しい癒しの匂いである。Heaney は，詩は意識が極端な危機に直面したとき経験する二つの相矛盾する必要を満たすものだという。酷い現実を告げる必要性と，そのような現実の中で優しさや信頼を否定するほどに心を頑なにしなくてもよい必要性である。

> It satisfies the contradictory needs which consciousness experiences at times of extreme crisis, the need on the one hand for a truth-telling that will be hard and retributive, and on the other hand, the need not to harden the mind to a point where it denies its own yearnings for sweetness and trust.[21)]

この実例こそ，ミニバスのプロテスタントとカソリックの手を握り締めた一瞬であり，Kelvin が現実の体の痺れを我慢しながら雛の孵るのを待った祈りの姿勢，そして，Yeats の崩れかかったムクドリの巣にハチに巣を作るようにといった希望。詩の役目は悲壮な現実にわが身を曝しながらも，人間の優しさの本性に触れることを訴える。

> ‘to touch the base of our sympathetic nature while taking in at the same time the unsympathetic reality of the world to which that nature is constantly exposed’[22)]

Heaney にとって詩は共感に訴えかけ，癒し，希望，平和，愛情などを呼び起こすことである。“for works of lyrical beauty and ethical depth, which exalt everyday miracles and the living past” とのノベール賞受賞理由は，北アイルランドの絶望的な状況で，人々の琴線に触れ “a meagre heat” を熾してきたためでるといってもよい。Heaney が何故詩に信頼を置くのか。T.S. Eliot が1942年戦時中，

21）*Ibid.,* p. 26.
22）*Ibid.,* p. 29.

ロンドンで，‘Little Gidding’を書いていたときの文章を引用しながら，Heaneyの考えを述べる[23)]。Eliotは，外での戦乱のさなか，机に向かって，言葉や韻律を毎日いじって過ごすことが正当化される行動か自信をもてないのだが，“on the other hand, external or public activity is more of a drug than is this solitary toil which often seems so pointless.”と，日常の活動より，詩を書くほうがもっと現実を直視することだという。意味がないようにみえる詩作活動は麻薬で逃避のように見えるが，それ以上に外的な公の活動は麻薬にかかっている。HeaneyはEliotの詩の説明を“paradox of poetry and of the imaginative arts in general”であるといい，現実には，確かに芸術は虐殺や戦車の前に無力である。しかし，詩や芸術は“they verify our singularity, they strike and stake out the ore of self which lies at the base of every individuated life.という。これは先に引用したHeaneyの“to touch the base of our sympathetic nature”と同じ意味である。人間の根幹にある鉱石（“ore”）を打つという表現を使っているが，ここで“meagre heat”の比喩をさらに言うならば，“strike the ore”（鉱石を打つ）と‘Tinder’で“fint”を打って出た“a weak flame-pollen”と同じことであって，詩は人間性の本質“base”，“ore” を打つことによって，残忍な現実のなかでさえ「ほのかな温もり」を生み出すという。つまり，琴線にふれ，呼び起こされる共感が“meagre heat”ということになる。

HeaneyはEliotの引用の後，“paradox of poetry and the imaginative arts”について，ヨハネ８章１節～12節の姦淫の現場を取り押さえられた女の箇所を取り上げている。姦淫の女は，モーゼの教えでは石打ちの刑に処せられるべきだが，神の子といわれるイエスはどう裁くか，パリサイ人たちはイエスを試そうと女を引き連れてきた。詰め寄る告発者たちを尻目に，イエスは地面に屈んで，彼らの言い分が聞こえていないかのように，指で書いていた。告発者たちがさらに問い続けるので，イエスは「あなたがたのうちで罪のない者がまず石をなげなさい」と言い，再び身を屈めて地面に書かれたとある。この地面のイエスが書いた文字を“The drawing of those characters is like poetry, a break with the usual

23）*The Government of the Tongue*, pp. 107–108.

life but not an absconding from it.” と Heaney は詩のようなものと説明をしている。この姦淫の女を裁く者は，結局，聖書では誰もいなかったが，詩はこのように解決を提示するものではない。詩は “a break with the usual life” といい，さらに “in the rift between what is going to happen and whatever we would wish to happen, poetry holds attention for a space. という。酷な現実と望む未来の狭間で，しばしの間，関心を背けるのではなく，関心を集中させるのが詩であるというのだ。‘Punishment’ で British の者と関係を結んだという理由で姦淫の女が仲間からタールをかけられ処罰を受けた時の詩人の “artful voyeur” の立場を説明する詩論である。Heaney は，告発する現実とさらし者になっている者とさらに詩の関係をこうして見事に説明する。

Heaney は *North* 以後，*Field Work*，*Seeing Things* と詩集の版を重ねるに従い，自己嫌悪，罪意識から脱し光を求める。故国の動乱，混乱，惨状のなかで，“Stop just licking your wounds. Start seeing things”[24] という表現を1961年に出した Sophocles の翻訳，*Cure at Troy* で用いている。Neoptolemus が Philoctetes に述べた言葉であるが，Philoctetes の弓なしにはギリシャはトロイには勝てない。脚の傷で Lemnos の島に置き去りにされた Philoctetes がトロイに向かうまでを扱った劇であるが，Heaney がこれを訳した理由は容易に想像できよう。北アイルランドの傷口だけを云々するのではなく，さまざまなものを見（“seeing things”），ことの本質を見極めるという原型をこの作品に見たからであろう。この “seeing things” という標題をつけた Heaney の *Seeing Things*（1991）の詩集の最後には Dante の『神曲』の地獄編の一部（Canto Ⅲ, 82–129）が収められている。Virgil に導かれ Dante が黄泉の世界に旅立つべく川の岸辺に立つ場面である。Virgil も Dante も故郷を追れた詩人なのだが，Heaney は Dante と立場を重ねて読めるだろう。北アイルランドから逃げ延びた Heaney にしてみれば，その同じ苦しみを味わった詩聖 Virgil がこれまた故郷を追放の身となった Dante を天上界に導くのである。渡し守り Charon は，Dante に，お前は別の岸に行くのだ，“A lighter boat must be a carrier” と言って，渡し舟に乗せるのを断っ

24）Seamus Heaney, *Cure at Troy*, p. 74.

た。Virgil が Dante に言った次の言葉で，*Seeing Things* は終っている。それは “If Charon objects to you/ You should understand well what his words imply.” の言葉なのだが，われわれはこの言葉に Heaney の詩への確信を読むことができるだろう。（北アイルランドの）地獄をさらに行かなければならないにしても，詩聖 Virgil を導師として，‘North’（*North*）で “Compose in darkness./ Expect aurora borealis/ In the long foray/ But not cascade of light.” と詠った Heaney は，*Seeing Things* では天上界の “cascade of light” を求める旅に出ていることを意図したのであろう。‘Exposure’ でどうしてこのような羽目になってしまったのだろう，と “meagre heat” を求めて，バラの実のような “those million tons of light” の光源を見失ったと嘆いた詩人は，人の心の琴線に触れながら，光の世界への巡礼の旅を心にとめていたのであろう。

1970年代 Dante を好んで読み[25]，北アイルランドと「地獄篇」とを重ねた Heaney は，1995年のノーベル賞受賞講演で *Crediting Poetry* と題し，ついに訪れた北の平和を喜ぶ人たちの祝福を背に，詩への信頼を説いたのである。Heaney の詩が発してきたのは “meagre heat” どころではない。それは強烈なものであり，今後も人々の “ore of self” を打ち多くの人々に温もりと共感を与え続けることは間違いないであろう。

25）Karl Miller, *Seamus Heaney in conversation with Karl Miller*（London: BTL, 2000）, p. 34.